

東アジアの共生社会構築と宗教の役割

オ・ジェシク（ワールドビジョン前会長）

1) 20世紀を克服するために

国家間、あるいは人々の間で20世紀を超えるというのは非常に難しい課題として残っている。それは、時間と空間の定理から、わたしたちの学問、文明、文化、宗教、思想、習慣などあらゆる分野で新たに考えと行動が生まれなければならないからです。

20世紀前半、世界大戦を二度も引き起こし、後半では冷戦体制を創り、世界を二つに分けて、局部的戦争行為を正当化してきた。その背景には19世紀の国家主義、18世紀に定型となった人間の自由、自由主義、近代化思想の枠組み、経済成長至上主義など西欧の思想的基盤があった。この過程で宗教も決して自由たり得なかった。いや、宗教が、とりわけキリスト教がこの過程で先頭に立ち、先導し、また行動した。

わたしたちの世代はこのような過程の結果を目撃した人々である。初期資本主義の非人間的な形態に対して反抗していた社会主義者たちの挑戦は革命を経て、20世紀初めに国家社会主義として確立したが、世紀が新たになる前の1990年に幕を下ろした。その最後を見た資本主義陣営は勝利者となったかのように自信満々となり、アメリカを中心とした一極体制へと移行するかと思われたが、それから20年にもならない2008年、自由市場、経済至上主義が深刻な危機を迎えたのである。20世紀後半50年間の冷戦体制を押し立てた両陣営の競争は地球村の自然秩序をその根本から危機に追い込んだ。人間中心主義、自由至上主義は多くの宗教の支持を受けて傲慢になり、敵対勢力の制圧と自然の支配は宗教の祝福のもとに、はばかることなく遂行されてきた。

20世紀を克服するという事はたやすいことではない。まず、近代化の理念、発展、成長理念を乗り越えること。国家主義を軸とした敵と我々という二元的思考に打ち勝つこと。そして、敵対勢力に勝つこそ、自分たちが生き残るといふ戦争コンプレックスを克服することなどである。さらに民族、国民、文化、宗教、歴史を超えて「人」を見出し、打ち立てることである。人を、それぞれ尊厳を持った主人と認め、扱うことは宗教の使命であろうが、そう出来ていないのが現実である。国家主義にとらわれた社会主義的理想と市場至上主義の奴隷に成り下がった自由に対するあこがれが、新しい人の世界を考えるビジョンと枠組みを再び生みださなければならないだろう。

2) アジア人として立つ

アジア人として立つことが、20世紀国家主義の延長線上で考える地域主義になってはいけない。ここではアジア人としてのアイデンティティを確立しようということである。日本人たちは西洋文明と文化にあこがれて、アメリカとの政治・経済・軍事的癒着関係に巻き込まれた。韓国人たちは日本を通して、西洋を見ていて、日本と同様アメリカとの多次元での癒着関係の一員になった。解放後65年間、日本と韓国はこの枠組みから抜け出せないまま、いまだに東アジア地域での冷戦体制を克服できずにいるのが現実である。東アジアの構想と未来を考える時、朝鮮半島問題を避けて通ることはできず、朝鮮半島問題の克服は20世紀的力の関係の延長線上ではなく、21世紀的想像力によってのみ可能なのである。

東アジアを論ずる時、我々は韓国・中国・日本のことを話すのが常であるが、その枠組みから台湾・北朝鮮・モンゴルを外して、構想を練ってはならないだろう。1950年の朝鮮戦争は冷戦体制構築の根拠となり、国連の名において16カ国が参戦した。社会主義陣営からも中国と北朝鮮の軍隊が先頭に立ったが、当時のソ連の戦略的支援と東欧の軍事物資支援と政治的応援を無視することはできない。また、日本には米軍の司令部があったし、軍事的後方基地の役割を果たした。そのように込み入った東アジアの冷戦体制清算のために、2003年6者会談が開始されたが、それは各国外交官たちの遊び場と化し、おもちゃは北朝鮮の核問題だと言える。さらにはこの地域の冷戦体制克服を朝鮮半島の南北問題と矮小化し、皆腕組みをして模様眺めをしている。これは、EU形成過程と比べると、鮮やかな対照を成している。

20世紀の清算という視点から見ると、朝鮮半島問題の解決のための六者会談は東アジア共同体を構想する新たな作業の始まりとも言える。六カ国は例外なくすべて、この地域で19世紀末から戦争に関わった歴史を持っている国々である。戦争の20世紀を正しく清算できないまま、円卓会議に着席したのである。わたしはずいぶん前から六者会談は六カ国のトップが集い、まず将来のビジョンを明確に約束し、その枠内で継続課題として、核問題・国交正常化問題・経済協力問題を協議すべきだと主張してきた。六カ国が扱わなければならない課題は20世紀の敵対関係をどのように清算しなければならないかであり、それがこの地域での冷戦体制克服とつながっていくのである。このように未来指向的なビジョンに対する合意がなされ、互いの信頼関係成立への確信が生まれるなら、北朝鮮の核問題は副次的に解決するだろう。

このような角度から見ると、韓・米・日三国の軍事同盟は冷戦体制時代、ソ連（当時）・中国・北朝鮮の軍事同盟に対峙した構造であったが、今やロシアや

中国に対するものではなく、北朝鮮に対する軍事的圧力として認識するようになった。言い換えると、韓国と日本はいまだにアメリカの軍事力に隠れたまま、東アジアの平和ビジョンを云々する形になっている。1972年、中国の周恩来首相がアメリカの記者との対談で「中国は朝鮮半島に米軍が駐屯していることに反対しない。米軍が撤退すれば、その次に日本軍が韓国に入ってくるのではないかと憂慮されるからだ」と言ったことばが思い出される。それから、40年近くも経ったが、日本に対する中国の信頼が回復したかどうかはいまだに分からない。

日本の評論家、佐藤勝は最近の著書で2009年8月30日を日本政治史の大きな転換点だと評価した。1955年から半世紀の間、政権を取ってきた自民党の敗北を指して言ったことばである。同様の例として、アメリカのオバマ大統領勝利が全世界に大きな影響を引き起こしたことを挙げるができる。アメリカと日本で市民たちが20世紀的政治形態を拒否したにも関わらず、両政府共に新たなビジョンを提示できずにいる。このような中身がからっぽの空間こそ、市民団体、宗教団体が満たさなくてはならないのではないだろうか。政治過程でロマン的な期待は禁物であるが、新しい方向のとっかかりを宗教・市民団体は創りだす役割を持っている。

日本の坂本教授は世界（2010年1月号）で、すべての人が基本的人権と尊厳の主体であることを認める世の中を創ろうと訴え、国際関係で人道主義的原則が擁護されなければならないと力説した。その例として、北朝鮮に対する人道的支援が政治的打算と戦略的措置によって中断していることを嘆いている。このような姿勢を韓国・日本・アメリカ三国が同様に取りている。飢えている人々をえさに北朝鮮政府に圧力をかけようという戦略にちがいない。裏返して言うと、各国政府のこのように低レベルの戦略的措置に挑戦できずにいるのが韓国・日本・アメリカ三国の市民・宗教団体の限界である。

このような脈絡の中で、また押し寄せてくる無力感にも関わらず、わたしたち宗教団体は良い世の中を思い描く能力を放棄してはならない。この地域に平和な共同体を創りだすために、またそのビジョンを後世に伝えるために韓国と日本の宗教者たちは特別な役割を果たさなければならない。まず、韓日両国の人々の間での信頼関係を創ることが大切である。韓日間の過去の歴史のおりは双方が共に未来指向的になってこそ、克服できる。そのような意味でわたしたちはそれぞれの国家の中で、国益を超える力をはぐくまなければならない。東アジア共同体を築き上げようという夢を共有し、その遠大な歴史的プロジェクトのためには

a) ヨーロッパの近代史展開過程から抜け出す（人間の自由至上主義、経済成長

主義から抜け出す)。

b)アメリカが覇権的一極体制から抜け出し、国際主義的、普遍的な価値を擁護する柱となるように勧める。

c)だれであれ、人間として生きる権利と尊厳を認め、そのために社会的安全網を具体化する。

d)経済の成長と発展の執着から抜け出し、自然の秩序と共生する枠組みを創る。

3) 宗教の役割

言うまでもなく、キリスト教は西洋の近代化思想の形成とその展開過程で中心的な役割を果たした。人間を中世の封建体制から解放する大きな役割を担ったが、自由を得た人々のその後の行動は監視できなかった。この過程でキリスト教という宗教は理念化し、政治・経済の理念構造から自由であり得なかった。このような歴史的あやまちを深く反省し、宗教が自己防衛のために理念で包み込むことを防がなければならない。宗教者は謙遜と解放が本来の姿勢であり、そこから生じる不安を抱きながらも毎日取り組んでいくのである。

仏教は国家主義から自由ではなかったが、人を治め慈悲を实践する教えの日常化という点では優れており、影響力を持っている。さらに愛と生を、そして自然秩序との関係で、和合、尊厳と霊性を教えまた訓練してきたことはキリスト教とは対照を成している。環境問題において、人間が環境や地球上の生物と共存共生するにあたり、仏教が先導的な役割を果たさなければならない。

韓日間の宗教者たちは「東アジア共同体形成」という共通の課題の前で互いに協力する作業を絶えずしなくてはならない。東アジアのアイデンティティは人を人として認め、尊重することに置かなければならない。多文化、多元社会、諸宗教が特徴となっている、この地域の人々がみな、その尊厳が認められ、国家や市場の利益よりは彼らの安全が優先されなくてはならない。人の安寧と安保が国家の安保より優先することが最終目標にならなければならない。このようなビジョンと目標は宗教間の対話と協力の基盤になるだろう。さらに宗教者たちは人々が貧困と飢餓に打ち勝つように助けるべきであり、それに必要な社会的安全網を作り上げるために、互いに協力しなければならない。このような基盤とネットワーク創り、またそのための努力を宗教的情熱で展開していくことが東アジア共同体形成の出発点になるだろう。戦争がない共同体、受け入れ合い、互いの人間安保を尊重する関わりを創っていくことは新しい世紀を設計する基礎になるだろう。

坂本教授は先述の論文で、このような運動が地域空間に閉じ込められることなく、地域の境を越える行動として発展しなくてはならないと説いている。わたしもその提案に大賛成である。実際、わたしは大分前から1955年のバンドン会議を再評価しようと提案した。去る1月東京で解された、ある集いで、発題者を務めたわたしは第二回バンドン会議を企画しようと提案し、それをピョンヤンで開催したらどうかと話した。人々はみな面食らっていたが、わたしたちはまったく新しい想像力が必要な時点に立っている。バンドン会議にはアジア、アフリカの代表が共に参加し、等しく帝国主義の支配から抜け出そうと夢を分かち合い、協力しようと誓った。歴史の新たな転換点に立ち、アフリカの人々に手を差し伸べ、そして互いに肩を組み合える宗教的想像力が求められる。そのような関わりにおいてこそ東アジアのアイデンティティが定着し、わたしたちが、現時点で想像する共同体が目に見える、触ることのできる実体になるだろう。わたしも坂本教授のように、ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体 (Imagined Community)」のように、夢を引き継いでいこうということばで締めくくることにしたい。

《以上》